〔学術資料〕

拡大する貧困層世帯の高校生とアルバイトとの関連性

The Relationship Between Part-Time Jobs and the Increase of Family Poverty Rates among High School Students

小　島　俊　樹

Toshiki KOJIMA

Studies in Humanities and Cultures

No. 15

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　15号

2011年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JUNE 2011

〔学術資料〕

拡大する貧困層世帯の高校生とアルバイトとの関連性

The Relationship Between Part-Time Jobs and the Increase of Family Poverty Rates among High School Students

小　島　俊　樹
Toshiki　Kojima

１　はじめに―当論文の目的
２　調査方法について
３　高校生アルバイトの実態
４　アルバイト経験者と貧困世帯との関連性
５　まとめ

要旨　現在、職業高校では４割台、定時制高校では５割台の生徒が貧困世帯に属しており、彼らは高校生らしい生活する費用や、中には家計を助けるため、アルバイトをしていると予想される。

その予想を検証するため、2010年10月名古屋市内の高校において、生活実態調査を実施した。その結果、職業高校では約５割、定時制高校では約６割５分の生徒がアルバイトをしており、貧困世帯の高校生の割合を少し上回る数値になっている。

アルバイトの実態は、①１学期と夏休みとか関係なくアルバイトをし、②経験者の約８割は、曜日に関係なく数日働いている。③週労働時間は、経験者の４割が15時間以上となっている。④アルバイトの職種は、ファミリーレストランやファーストフードなどの飲食店とコンビニエンスストアなどの小売店で８割を超える。⑤月収入は、約６割が５万円以上である。⑥使途は、高校生らしい生活の費用が８割で、学校関係が１～２割である。ただ、家計を助ける生徒も２割近くいる。

次に、こうした実態のアルバイト経験と貧困世帯との関連性を考察する。まず、アルバイト経験と学校関係との関連性は、関連性が見あたらない。家庭生活関係**との関連性は、若干見られる。アルバイト経験者は、未経験者より家庭の暮らし向きを苦しく感じており、その６割が小遣いをもらっておらず、アルバイトで働く理由となる。とくに、母子家庭では非母子家庭より家庭の暮らし向きを苦しく感じており、アルバイト経験者の割合が高くなっている。**

キーワード：高校生、貧困層、アルバイト、母子家庭

１　はじめに―当論文の目的

筆者は、前論文（『人間文化研究』14号P177 以下同様）において、高校生の世帯ではここ約10年間で急速に貧困層が拡大しており、特に職業科では40％以上、定時制では50％以上の生徒が貧困層世帯に所属していると推定した。この際、貧困層の基準は、相対的貧困基準（４人世帯年収316万円2005年）では低すぎるとして、自治体が用いる給与所得控除を足すやり方で４人世帯年収450万円（2005年）を設定した。

この年収450万円には税金や社会保険料も含まれており、実際の可処分所得は300万円台半ばである。つまり、夫婦２人に高校生１人その他子１人の家族が、月30万円未満で住居費や食費などを支出して生活していくのだ。高校生や中学生は、育ち盛りかつ食べ盛りで衣服費や食費にも支出が増え続け、さらに教育費が加算されるため、子どもの養育費は生活費を圧迫する。

また、苦しい家計でも、高校生は10代後半の若者として、ただ家と学校を往復するだけではなく、様々な消費意欲を駆り立てられる環境にいる。例えば、部活動のため必要な費用や、友人との交際費、音楽やマンガなどの娯楽費、情報を得るための携帯電話やパソコなどの費用と数限りない。では、こうした高校生として「人並み」に過ごすための費用も、月30万円未満の家計の中に衣服費・食費・教育費とは別に確保できるか問題となる。

小遣いなどの形で親から支給されなければ、「我慢する」か、アルバイトをしてその費用を調達するしかない。しかし、こうした高校生として「人並み」に過ごすための費用のためのアルバイトを、「勉強を怠けて贅沢するため」として批判的に見ているのが、一般的ではないであろうか。にもかかわらず、高校生アルバイトに関する先行研究は、実態調査をしつつも、貧困化とアルバイトと結びつけ、高校生アルバイトに対する一般的な見方を批判するものは見あたらない。

筆者は、高校生が「人並み」に過ごす費用は、高校生が自分で負担しなくても保証されるべき生活費の一部であり、それを保証できない高校生世帯の貧困化と高校生アルバイトは関連性があると考えている。もっとも、現実は、もっと過酷である。前論文でも、学校納入金の未納者が急増していることを指摘したが、滞納返済の多くは、生徒がアルバイトをして支払っている。さらに、筆者が現代社会の授業中に、「派遣切り」について解説していると、突然生徒が立ち上がり、「うちの親父は、解雇されて家計が苦しい。いくらアルバイトしても家計の足しにされ、遊ぶ金もない。」と叫んだことが強烈な印象として残っている。また、労働組合の奨学金に応募した母親が、「体調を崩し月８万円の収入しかない。娘のアルバイトの収入が無ければ生活していけない。」と訴えていた。

高校生が「人並み」に過ごす費用どころか、家計の足しとして世帯の生活費を支えている高校生アルバイトも存在している。実際に、筆者は高校教員として、自分の家庭が経済的に苦しいためアルバイトを何件も掛け持ちしているたくさんの高校生に出会った。しかし、給付制奨学金制

度など高校生の修学保障をするために、高校生アルバイトと高校生世帯の貧困化とを結びつける数量的に把握する統計資料を、筆者は把握していない。よって、当論文では、高校生世帯の貧困化と高校生アルバイトの関連性を、筆者が実施した高校生実態調査で検討していくことを目的としている。

2　調査方法について

質問項目について、前半はアルバイトの実態を2010年度の１学期と夏休みの違いを把握するため、別々に質問した。後半は貧困化とアルバイトの関連性をつかむため、学校生活や家庭生活の項目を工夫した。しかし、プライバシーの問題があり、家庭の経済状況を詳しく聞くことはできなかった。

さらに、調査実施には各高校の校長の承諾が必要とされ、全日制職業科高校と定時制高校では依頼した学校のほとんどで承諾を得ることができ、多くの回答数を得ることができた。しかし、全日制普通科高校では、わずか２校でしか承諾を得ることができず、正確な分析するには十分な回答数とはいえず、全日制普通科高校での調査実施が、今後の課題となった。

実施方法は、クラス担任や教科担任が一斉配布し、調査の趣旨と、匿名でありかつ答えたくないことは答えないことを説明して実施した。

表１　普通科・職業科（工業・商業）・定時制と学年別と性別の回答数と割合

学科名	回答数(人)	割合
全日制普通科	173	10%
全日制職業科	1402	80%
（工業）	937	53%
（商業）	465	27%
定時制	182	10%
合計	1757	100%

学年	回答数(人)	割合
１年生	38	2%
２年生	695	39%
３年生	1012	58%
４年生以上	12	1%
合計	1757	100%

性別	回答数(人)	割合
男	911	52%
女	843	48%
無回答	3	0%
合計	1757	100%

３　高校生アルバイトの実態

（１）　学科別にみるアルバイト経験の相違

表２　１学期アルバイト経験者数と回答者中の割合

学科別	１学期アルバイト経験者数	回答者中の割合
全日制普通科	173人	31%
全日制職業科	1402人	48%
定時制	182人	65%

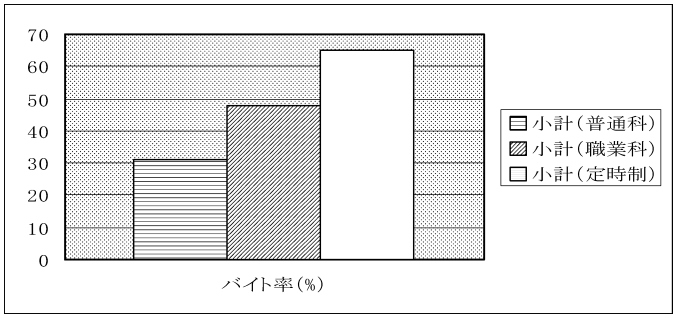

図１　１学期アルバイト者経験者割合の学科別

表３　１学期アルバイト経験者数と回答者中の割合の学校別

学校名	経験者の割合	回答者(人)	経験者(人)
Ａ工	43.7%	529	231
Ｂ工	40.6%	229	93
Ｃ工	50.0%	140	70
Ｄ工	30.8%	39	12
Ｅ商	52.9%	155	82
Ｆ商	69.1%	233	161
Ｇ商	28.6%	77	22
小計（職業科）	47.9%	1402	671
Ｈ高	0.0%	38	0
Ｉ高	39.3%	135	53
小計（普通科）	30.6%	173	53
Ｊ定	40.7%	54	22
Ｋ定	72.0%	93	67
Ｌ定	82.9%	35	29
小計（定時制）	64.8%	182	118
合計	47.9%	1757	842

表２と図１で明らかのように、１学期アルバイト者経験者割合の学科別は、**全日制普通科が31％、全日制職業科が48％、定時制が65％となっている。とくに、職業科と定時制では、前論文で推定した高校生世帯における貧困率と近似した数値を示している。もちろん、このことで貧困世帯の高校生がみんなアルバイトを経験しているとする根拠にはならないが、**高校生世帯の貧困化と高校生アルバイトの関連性を示す、重要な数値であると考える。

次に、表３の学校別アルバイト経験者割合を見ていく。まず、全日制普通科は２校しか調査していないが、H高は市内でも有数の進学校でアルバイト経験者は無く、Ｉ高は偏差値的には職業科と同レベルでありアルバイト経験者も、約40％と職業科に近い数値となっている。前論文でも、授業料減免者率（市民税非課税の世帯が対象）や学校納入金未納率は、普通科において偏差値が低くなるほど高くなっており、偏差値の低い普通科では貧困世帯が増加している。ここでも高校生世帯の貧困化に伴い、高校生アルバイトが増加するという関連性があると思われるが、全日制普通科の回答数が少ないため、全日制普通科における正確な関連性については、今後の研究課題である。

職業科において、工業科の４校のアルバイト経験者割合が平均して約43％であるのに対し、商業科の３校は約67％である。なお、G商だけが他の２校に比べて割合が低いのは、アルバイトを禁止しているためである。商業科の方が、20％以上アルバイト経験者の割合が高いのは、商業科は９割近く女子が占め、男子に比べ「人並み」の高校生生活に費用がかかりかつ接客などサービス業の需要も多く、アルバイトが見つけやすいためと思われる。

定時制において、Ｊ定が他の２校に比べアルバイト経験者割合が低いのは、Ｊ定が昼間定時制であり、授業料減免者率も夜間定時制に比べ半分以下で貧困世帯の割合も低いためと思われる。ここにおいても、高校生世帯の貧困化と高校生アルバイトの関連性が示されている。

（２）　１学期と夏休みのアルバイト経験者の相違

表４　１学期アルバイト経験者数と回答者中の割合

アルバイト経験	回答数(人)	割合
有り	842	47.9%
無し	909	51.7%
無回答	6	0.3%
合計	1757	100%

表５　夏休みアルバイト経験者数と回答者中の割合

アルバイト経験	回答数(人)	割合
有り	812	46.2%
無し	938	53.4%
無回答	7	0.4%
合計	1757	100%

調査前には、１学期より夏休みの方が、アルバイト経験者数が増加すると予想し、調査項目も別々に設定した。しかし、結果は表４と表５で明らかように、ほとんど相違がなかった。そのため、当論文では、１学期の調査結果のみを用いることとする。

（３）　１学期アルバイト経験者の実態

①　アルバイトの曜日と１週間あたりの労働時間

表６　アルバイトの曜日

アルバイトの曜日	回答数(人)	割合
毎日	52	6.2%
平日のみ	53	6.3%
土日のみ	130	15.5%
平日と土日の何日か	483	57.4%
不定期	123	14.6%
合計	841	100.0%

表７　１週間あたりの労働時間

週労働時間	回答数(人)	割合
５時間未満	120	14.3%
５～10時間未満	212	25.2%
10～15時間未満	170	20.2%
15～20時間未満	177	21.0%
20～25時間未満	101	12.0%
25時間以上	62	7.4%
合計	842	100.0%

アルバイトの曜日については、「土日のみ」に集中すると予想した。表６の結果からは、確かに「平日のみ」より、「土日のみ」の方が多いが、「平日と土日の何日か」が57%と６割近くあった。これは、アルバイト経験者の半数以上が、平日や土日という曜日と関係なく、１週間に何日かアルバイトをしていること示している。アルバイトの職場における勤務シフトの都合が、反映していると思われる。

また、１週間あたりの労働時間は、表７より15時間以上がアルバイト経験者の４割以上を占める。

週３日アルバイトをすると、１日５時間以上の労働時間となる。これでは、平日のアルバイトの場合、午後10時すぎまで働く生徒も数多く存在すると思われる。さらに、アルバイト経験者の7.4%が週25時間以上働いており、学校生活以外ほとんどをアルバイトで過ごしていることとなる。

② アルバイトの職種

表８　アルバイトの職種

アルバイト職種	回答数(人)	割合
ファーストフード	171	16.8%
ファミリーレストラン	69	6.8%
それ以外の飲食店	336	33.0%
コンビニエンスストア	157	15.4%
それ以外の小売店	126	12.4%
ガソリンスタンド	25	2.5%
工場や製作所	14	1.4%
工事現場や建築現場	17	1.7%
その他	103	10.1%

アルバイトの職種は、表８より、ファーストフードやファミリーレストランなどの飲食店が56%と半数以上を占め、次にコンビニエンスストアなどの小売店が28%を占め、両者で84%にのぼる。一方、ガソリンスタンドや工場、工事現場などはわずか5.6%にすぎない。

③ アルバイトの月収入

表９　アルバイト月収入

アルバイト月収入	回答数(人)	割合
１万円未満	9	1.1%
１～２万円未満	72	8.6%
２～３万円未満	134	16.0%
３～４万円未満	152	18.1%
４～５万円未満	159	19.0%
５～６万円未満	82	9.8%
６～７万円未満	79	9.4%
７～８万円未満	58	6.9%
８～９万円未満	27	3.2%
９～10万円未満	28	3.3%
10万円以上	38	4.5%

アルバイトの月収入は、月４万円以上で58%を占めており、平均すると５万円をこえると思われる。この５万円という数字は、後述する高校生の生活費に関する別調査の結果による、高校生が１ヶ月で必要とする生活費５万円という数字と合致する。

また、月収入８万円以上が11%となり、１週間の労働時間は少なくとも20時間以上であり、学

校生活以外ほとんどをアルバイトで過ごしている。

④　アルバイト収入の使途

表10　アルバイト収入の使途（複数回答　割合はアルバイト経験者842人に対すもの）

使途項目	回答数(人)	割合(%)
飲食代	578	69%
電話代	348	41%
交際費	663	79%
衣服雑貨	637	76%
本雑誌CDDVD	597	71%
教材費実験実習費	75	9%
検定料	145	17%
定期代	103	12%
部活動費	84	10%
文房具問題集等	178	21%
塾予備校費	12	1%
進学用貯金	131	16%
生活費補助	152	18%
とりあえず貯金	346	41%
その他	58	7%

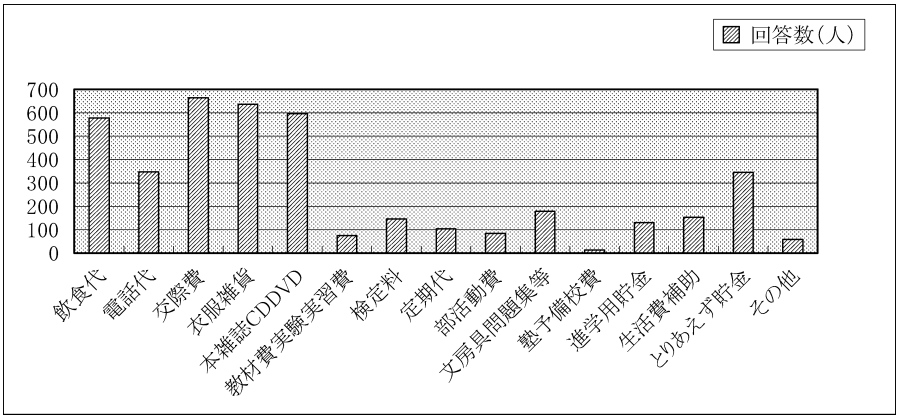

図２　アルバイト収入の使途

表10では、飲食代から本雑誌CDDVDまでの生活費関係は、約７割のアルバイト経験者が支出している。教材費実験実習費から文房具費問題集等までの学校生活費は、１～２割の経験者が支出している。また、進学用貯金が16%、生活費補助が18%の経験者が支出しており、学校関係費と併せ、経験者の２割程度の経験者が生活費以外に、家計を助けていると思われる。

4　アルバイト経験者と貧困世帯との関連性

（1）　アルバイト経験と学校関係の質問項目との関連性

表11　１学期アルバイト経験者と学校生活への満足度

		学校生活への満足度					
		とっても楽しい	楽しい	あまり楽しくない	つらい	その他	合計
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	239	417	104	32	46	838
	割合	29%	50%	12%	4%	5%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	205	512	105	31	48	901
	割合	23%	57%	12%	3%	5%	100%

表12　１学期アルバイト経験者と進路希望

		進路希望						
		４年生大学進学	短大専門学校進学	就職	アルバイト等	家事手伝い	迷っている	合計
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	132	186	399	22	2	81	822
	割合	16%	23%	49%	3%	0%	10%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	239	137	445	2	3	67	893
	割合	27%	15%	50%	0%	0%	8%	100%

表13　１学期アルバイト経験者と自立希望

		自立希望				
		早く一人暮らし希望	経済的理由より親同居	親と同居希望	迷っている	合計
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	366	222	116	121	825
	割合	44%	27%	14%	15%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	355	231	121	187	894
	割合	40%	26%	14%	21%	100%

１学期アルバイト経験者と学校生活の満足度とは、表11をみても、「とても楽しい」「楽しい」が経験者でも79%で、未経験者でも80%と同じく高く、関連性が薄いと思われる。また、１学期アルバイト経験者進路希望とは、表12をみると、４年生大学進学希望での相違はあるが、短大専門学校まで含めると、どちらも約40%前後でそれほど相違はない。就職希望も、どちらも約50%前後で相違はない。よって、アルバイト経験と進路希望とにおいても、関連性は薄いと思われる。さらに、１学期アルバイト経験者と自立希望においても、経験者の方が若干自立希望が多いが、同居希望はほとんど同じであり、関連性があるとまではいえないと思われる。

以上、アルバイト経験と、学校生活の満足度や進路希望、自立希望とは関連性が薄いと思われる。

（２）　アルバイト経験と家庭生活関係の質問項目との関連性

表14　アルバイト経験と小学校習い事

		小学校習い事		合計
		無し	有り	
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	276	566	842
	割合	33%	67%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	280	629	909
	割合	31%	69%	100%

表15　アルバイト経験と中高生宿泊家族旅行

		中高生宿泊家族旅行		合計
		無し	有り	
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	369	473	842
	割合	44%	56%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	362	547	909
	割合	40%	60%	100%

表16　アルバイト経験と自分用一人部屋

		自分用一人部屋		合計
		無し	有り	
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	290	552	842
	割合	34%	66%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	338	571	909
	割合	37%	63%	100%

表17　アルバイト経験と自分専用パソコン

		自分専用パソコン		合計
		無し	有り	
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	236	606	842
	割合	28%	72%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	198	711	909
	割合	22%	78%	100%

表18　アルバイト経験と自分専用電子辞書

		自分専用電子辞書		合計
		無し	有り	
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	646	196	842
	割合	77%	23%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	597	312	909
	割合	66%	34%	100%

表14から表18までの質問項目は、アルバイト経験者の方が未経験者よりも、「無し」を回答する割合が高いことにより、アルバイト経験者と貧困世帯との関連性を推定しようとしたものである。

１学期アルバイト経験者と未経験者との各質問項目における「無し」の割合の差は、「小学校習い事」２ポイント、「中高生宿泊家族旅行」４ポイント、「自分用一人部屋」３ポイント、「自分専用パソコン」６ポイント、「自分専用電子辞書」11ポイントである。確かに、２ポイントから11ポイントとわずかな差ではあるが、すべての質問項目でアルバイト経験者の方が、「無し」の割合が高い。よって、アルバイト経験者と貧困世帯との関連性を考える一つの材料となる。今後、世帯収入がわかる質問項目の検討が課題である。

（３） アルバイト経験と家庭の経済状況・小遣いの質問項目との関連性

表19　アルバイト経験と家庭の暮らし向き

		家庭の暮らし向き				
		かなり豊か	まあまあ豊か	やや苦しい	かなり苦しい	合計
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	39	329	328	99	795
	割合	5%	41%	41%	13%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	32	445	275	74	826
	割合	4%	54%	33%	9%	100%

表19より、「家庭の暮らし向き」が、「かなり豊か」「まあまあ豊か」を合計して、「豊か」と感じているのが、１学期アルバイト経験者で46%、未経験者で58%となっている。同様に、「やや苦しい」「かなり苦しい」を合計して、「苦しい」と感じているのが、１学期アルバイト経験者で54%、未経験者で42%となっている。

この結果で明らかのように、アルバイト経験者は未経験者より12ポイント高い半数以上の人が、自分の家庭の暮らし向きを苦しいと感じており、自分で高校生らしい生活費や家計を助けるため、アルバイトをしていると思われる。

表20　アルバイト経験と小遣い

		小遣い			
		定期的にもらう	不定期にもらう	もらわない	合計
１学期アルバイト経験有	回答者(人)	173	158	488	819
	割合	21%	19%	60%	100%
１学期アルバイト経験無	回答者(人)	570	181	125	876
	割合	65%	21%	14%	100%

表20より、お小遣いをもらっているのは、定期的不定期を合計して、１学期アルバイト経験者は40％であるのに対して、未経験者は86％であった。逆に、もらっていないのは、経験者が60％で未経験者が14％であった。高校生は、お小遣いが無かったり、不足することでアルバイトをすることがこの結果から考察される。

また、表19と表20を連続してみることで、アルバイト経験者は家庭の暮らし向きを苦しく感じ、お小遣いが無い、または不足するのでアルバイトをすることも考察できる。

（４）　アルバイト経験者と母子家庭との関連性

表21　１学期アルバイト経験者と母子家庭

	非母子家庭（人）	割合	母子家庭（人）	割合
アルバイト	1443	100%	308	100%
経験有	663	46%	179	58%
経験無	780	54%	129	42%

表22　母子家庭と家庭の暮らし向き

	非母子家庭（人）	割合	母子家庭（人）	割合
かなり豊か	67	5%	4	1%
まあまあ豊か	689	51%	88	31%
やや苦しい	467	35%	139	49%
かなり苦しい	118	9%	55	19%

表21より、母子家庭の高校生の方が、非母子家庭の高校生よりも、アルバイト経験者の割合が12ポイント高い。これは、表22より、母子家庭の高校生の方が、非母子家庭の高校生よりも、「家庭の暮らし向きは苦しい」と感じている割合が14ポイント高いためと思われる。

（５）　高校生が高校生らしく生活するための費用

①　調査の目的と方法

目的は、いくらアルバイトの実態調査をしても、そもそも、高校生が高校生らしく生活するための費用が、１ヶ月どれくらいかわかっていないと、アルバイトを評価できない。そこで、筆者は自分が勤務するＡ工高の２年生３クラス（111人）において、高校生が高校生らしく生活するための費用が、１ヶ月どれくらいかかるか、調査用紙を配布・回収した。

②　調査結果（2011年２月実施）

表23　高校生が高校生らしく生活するための１ヶ月の費用

		回答者(人)	割合
支出金額	１万円以上２万円未満	2	1.8%
	２万円以上３万円未満	9	8.1%
	３万円以上４万円未満	21	18.9%
	４万円以上５万円未満	21	18.9%
	５万円以上６万円未満	22	19.8%
	６万円以上７万円未満	12	10.8%
	７万円以上	23	20.7%
無回答		1	0.9%
合計		111	100.0%

表23より、高校生が高校生らしく生活するための１ヶ月の費用は、５万円以上と回答した高校生の割合の合計が約51%をとなった。よって、高校生が高校生らしく生活するための１ヶ月の費用は、５万円程度のなると考えられる。

５　まとめ

現在、職業高校では４割台、定時制高校では５割台の生徒が貧困世帯に属しており、彼らは高校生らしい生活する費用や、中には家計を助けるため、アルバイトをしていると予想した。

その予想を検証するため、2011年10月名古屋市内の高校において、生活実態調査を実施、1757人の回答を得ることができた。その結果によると、職業高校では約５割、定時制高校では約６割５分の生徒がアルバイトをしており、貧困世帯の高校生の割合を少し上回る数値になっている。

アルバイトの実態は、①アルバイトをするかどうかは、１学期と夏休みとか関係ない。②アルバイト経験者の約８割は、１週間において曜日に関係なく数日あるいは毎日働いている。③また、１週間の労働時間は、経験者の４割が15時間以上となっている。④アルバイトの職種は、ファミリーレストランやファーストフードなどの飲食店とコンビニエンスストアなどの小売店で８割を超える。⑤月収入は、約６割が５万円以上である。⑥使途は、高校生らしい生活の費用が８割で、学校関係が１～２割である。ただ、家計を助ける生徒も２割近くいる。

次に、こうした実態のアルバイトと経験と貧困世帯との関連性を考察する。まず、アルバイト経験と学校関係（満足度・進路希望・自立希望）との関連性は、表11～13より、関連性が見あたらない。家庭生活関係（**小学校習い事・中高生宿泊家族旅行・自分用一人部屋・自分専用パソコン・自分専用電子辞書）との関連性は、表14～18より、若干見られる。アルバイト経験者は、未経験者より家庭の暮らし向きを苦しく感じており（12%の差)、その６割が小遣いをもらっておらず、アルバイトで働く理由となる。とくに、母子家庭では非母子家庭より家庭の暮らし向きを**

苦しく感じており、アルバイト経験者の割合が高くなっている。

まとめると、平均的なアルバイト経験者は家庭の経済状況が苦しく、小遣いがもらえないため、高校生らしい生活を維持するため、さらには家計を助けるため、週数日15時間程度働き、表23の調査結果で示された５万円を稼ぎ出している。

課題としては、実態調査の結果分析については不十分であり、様々な角度からの研究が必要である。また、アルバイトと貧困世帯との関連性を鮮明にするために、追加の実態調査や事例調査を実施したい。

なお、データ整理・分析については、現代社会学科学生である江口、日下、酒井とともに実施した。

３名の全面的な協力に感謝する。

（研究紀要編集部は、編集発行規程第５条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2011年５月９日付）